

音声・音韻研究の現状と展望*

酒井真弓**

〈 Abstract 〉

Current Trends and Prospects of Studies on Japanese Phonetics and Phonology

This study outlines the phonetic and phonological studies published in 18 journals in South Korea from 2017 to 2018, and discusses their characteristics, prospects and challenges. The number of phonetic and phonological studies published in this period is 34, which is less than a half of the total of 73 studies published between 2015 and 2016. Among the 34 studies, 20 studies were about phonetic education, accounting for more than a half of the total. This indicates that the importance of phonetic education has increased. Furthermore, studies of new perspectives have also appeared, and this trend is expected to continue in the future.

Important future tasks include cultivating researchers, creating a large phonetic database of Korean learners, and building a new syllabus of phonetic education to utilize the research results in phonetic education.

Field : Phonetics, Phonology

Keywords : Pronunciation education, Segment, Prosody, Contrastive study, Dialect pronunciation

1. はじめに

本稿は、2017年から2018年にかけて、韓国で発行された18の学術誌¹⁾に掲載された音声・音韻関係の論文について概観し、今後の展望を述べることを目的とする。今期の音韻・音声研究に関する論文は34本で、前回の2015年から2016年を対象とした関光準(2016)の調査結果では73本であったのに比べると、半分以上に大きく減少している。その内訳は、日本語の音声を対象としたものが10本、日本語と韓国語との対照研究が2本、音声教育に関するものが20本、その他が2本である。

論文作成言語は韓国語が15本、日本語が19本と日本語のほうが多かった。執筆者の内訳は韓国人研究者が19名、日本人研究者が6名であった。また共同研究は34本中、4本と非常に少なく、いずれも執筆者数は2名であった。

最も多かった音声教育に関する論考は、全体の半分以上(59%)を占めていた。前回調査でも、音声教育に関する論考が42本でやはり全体の半分以上(58%)であったことから、前回に引き続き、音声教育の比重が高かったと言える。その内訳を見ると、分節音に関する論考が9本、韻律に関する論考が5本、パラ言語情報に関する論考が3本、その他学習者の意識やビリーフなどを調査した論考が2本と韓国における大学修学能力試験の問題に関する論考となっていた。

* This Research was supported by Duksung Women's University Research Grants 2018

** 徳成女子大学校 教授、日本語音声学・日本語音声教育学

1) 18の学術誌は韓国研究財団の登載誌である。各誌については参考文献を参照されたい。

韓国ではほとんどの研究者が、教育の現場で学習者の教育に直接関わっている。つまり、日々学習者の音声と接しており、学習者の習得過程を間近に見ながら、より効果的な音声教育を模索していると言える。したがって、研究の対象が学習者の音声や習得、音声教育の方法となるのは必然的であり、研究の意義や使命感を持っているというのがその理由ではないかと思われる。

今期の音声・音韻に関する研究の内訳を表にすると、次の〈表1〉のようになる。

〈表1〉 音声・音韻研究の研究の内訳

	音声教育				日本語音声			対照	その他
論文数	20				10			2	2
	分節音	韻律	パラ言	その他	分節音	韻律	方言	対照	その他
論文数	9	5	3	3	4	3	3	2	2

音声・音韻研究は20世紀の終わりと21世紀はじめにかけて、大きな変貌を遂げた。そのきっかけとなったのは、デジタル音声処理技術の発展と最適性理論の登場である。デジタル音声処理技術の発達によって、PCで音声分析ができるツールが開発され、現在ではpraatやwavesurferといったフリーウェアをダウンロードすれば、音声分析ができるようになった。また、最適性理論が提唱されて20年余りが経ったが、今もその検証と実証および修正が重ねられている。

このような20年を経て、やり尽くした感があるのも事実で、沈滞期に入っていると言っても良いかもしれない。しかし、その中でも今期の論考には、新たな視点による研究の拡がりが見られた。以上のことから、今期の特徴をまとめると次のようになる。

- 1) 研究の著しい減少
- 2) 音声教育研究の比重増加傾向の維持
- 3) 新たな視点による研究の拡がり

以下では、これらの特徴を踏まえ、音声教育、日本語音声研究、対照研究、その他の順に、それぞれの項目について概観することにする。

2. 音声教育

音声教育に関する論考は20本で、今期の特徴として、音声教育に関する研究の比重の増加傾向が続いていることは既に述べた。このうち学習者の音声を分析した論考が13本で、聞き取りテストによって習得度を測った論考が3本、その他の音声教育の論考が4本となっていた。ここでは、分節音、韻律、パラ言語情報、その他の順に述べることにする。

2.1 分節音

分節音に関する論考は8本で、特に新たな視点からの研究が多く見られた。有・無声音の問題では、これまで韓国語学習者が誤りやすい音として、語頭の有声破裂音と語中の無声破裂音がしばしば取り上げられてきた。今期もこの問題を取り上げた論考がいくつかみられた。

まず、陣宗福・関光準(2018)は、韓国語学習者が習得した語頭の破裂音をどのように発音しているのかを、VOTに注目して論じている。分析の結果、韓国語学習者は日本語の語頭有声破裂音をほとんど+VOTとして習得していたと報告している。また、これまで調査対象の音声は単語や文などの読み上げ(朗読)がほとんどであったが、これに対して、自然発話の場合とでは異なる結果となるのではという指摘がたびたびされてきた。同研究では、調査対象を自然発話としている点でも評価される。

韓国語学習者にとって習得が困難であると言われている「ザ行音」に関する論考が3本あった。「ザ行音」の有・無声に関して、崔鉉弼(2017)が、日本語母語話者と韓国語母語話者の日本語の語中有声摩擦音/z/について音響分析し、日本語母語話者では43.7%、韓国語母語話者では52.6%というかなり高い比率で声帯振動を示すボイスパーが見られない無声化現象が起きていると報告している。

高慧禎(2018)は、韓国語日本語学習者の「ザ行音」と「ジャ行音」の発話が日本語話者に不自然に感じられるのは、「ザ行音」→「ジャ行音化」と「ザ行音及びジャ行音」→「チャ行音化」、そして有声摩擦音 → 無声音化、韓国語摩擦音に見られるような気音の強さに起因した結果であると指摘している。

さらに藤田蘭子(2018)は、韓国語日本語学習者を対象に聞き取り調査を行って、日本語のザ行音とジャ行音の習得について調査し、初級と中級とでは聞き取り能力に差がなく、一般に難しいとされているザ行音のうち、ズとゾではジャとジョより正答率が高かったと報告している。

全美柱(2018a)は、日本語の短母音と長母音の知覚について、その反応時間に注目し、韓国語話者と日本語話者の反応時間の長さを比較している。その結果、韓国語話者では短母音に比べ長母音への反応時間が有意に長く、短母音に比べ長母音の判断に関する不確実性が高く、情報処理時間の消費で反応時間が遅延するためであると指摘している。

李敬淑(2017)は、韓国語学習者に対する知覚テストを実施し、有標性理論に基づいて習得の難易度を明らかにしている。同論文で李は、難易度の高かった語頭の無声音は言語個別的な特徴であり、口蓋音である拗音は有標音であることから、言語普遍的な特徴であるとしている。また、韓国語音韻システムにも存在せず、有標音である有声摩擦音/z/は、言語個別的にも言語普遍的にも韓国語学習者にとって習得が困難であると述べている。

さらに李敬淑(2018)では、音声認識アプリケーションを活用した音声教育を実践し、発音の習得度を縦断的に調査している。その結果、修得が難しいとされている日本語の「ざ行」の発音に顕著な矯正効果があったとし、ICTの特徴ともいえるべき発音に対するフィードバックの迅速性に対して、学習者が極めて肯定的であったと報告している。

これ以外では、韓国語学習者の日本語の母音のF1F2数値を日本語母語話者と比較した論考が2本あった。高慧禎(2017)では大学生を対象として、母音のF1F2から音響ダイアグラムを作成して、その分布に注目している。その結果、韓国語学習者の母音の発音では「う、え、お」の開口度と、「う」の舌の位置が幅広く分布していたと報告している。

また安鍾順・崔英淑(2017)は高校生を対象にした調査で「う」では日本語母語話者が中舌で発音していたのに対して、学習者の発音は後舌で発音されていたと報告している。

2.2 韻律

韻律を取り上げた論考は、イントネーションが2本、アクセントが3本で合わせて5本であった。イントネーションでは、北野孝志(2017)が韓国人学習者の語尾上げ現象を同じ無アクセント言語である北関東方言話者との比較から調査し、韓国人学習者は母語の影響を強く受けた発音上の一種の癖として語尾上げを発現させているのに対して、日本語話者の場合は、特にフォーマルな場などでは、意識的に語尾上げ現象を抑制できていると報告している。

酒井真弓(2018a)は、意見を述べるという自然発話における句末の境界音調の特徴を、日本滞在経験の無い学習者と6ヶ月-1年の滞在経験のある学習者、日本語話者との比較から調査し、滞在経験の無い学習者では下降調が多く見られ、日本語にはない音調がかなり見られたが、滞在経験のある学習者では、これらの音調はかなり少なくなっていた反面、日本語話者同様、上昇+下降調がかなり多く現れ、イントネーション句のピッチレンジも日本語話者とはほぼ変わらないほど大きくなっていたと報告している。

アクセントでは、金漢植(2018)がニュース原稿を用いたシャドウイングで、テキストにアクセント記号を記した時と記さない状態でのシャドウイングを比較した結果、アクセントの平均誤謬率が、記号表示状態では1.54%、未表示状態では4.36%と、アクセント記号を目で確かめながらシャドウイングすることの効果がかなり大きいことが分かったと報告している。また平均誤謬率が頭高型で1.74%と最も低く、平板型が2.63%、中高型は3.33%で、平板型の習得が難しいと指摘されている先行研究の結果とは異なる結果であったとして、これは高難度テキストには拍数の多い中高型の複合名詞がかなり多いためであると分析している。

酒井真弓(2018b)では、韓国人日本語上級学習者の自然発話におけるアクセントの正答率が、初・中級学習者を対象とした読み上げ調査よりずっと低くなっていたと報告している。また、学習者のピッチパターンは、語頭音の有声性に強く影響され、無声音の場合は第1モーラまたは第1モーラと第2モーラが同じ高さで高く、有声音の場合は第1モーラが低く発音されるほか、重音節内では高さが変化しない傾向が見られたと報告している。

また、寛山明代(2017)は、日本語能力試験N5レベルの出題単語と問題文の単語のアクセント型の傾向をまとめ、初級レベルの単語では単語数の多い名詞および動詞で平板型が最も多く、平板型アクセントの指導が必須であると述べている。

2.3 パラ言語情報

パラ言語情報は、高有眞(2017、2018)と、高有眞・成玟珂(2018)の3本の論考があった。高有眞(2017)は「すみません」が謝罪を示しているかどうかについて、韓国人の場合はピッチの変動幅が小さく、文末の持続時間が短くない発話を、日本人は文末の「せ」の時間長が同等レベルか短い発話を心からの謝罪と判定していると報告している。

また、高有眞(2018a)では、「そうだったんだ」「そうだったんですか」の発話と知覚について、母語話者と韓国人学習者を対象に調査し、持続時間が短ければ「理解」、長ければ「共感」の意図と判定する傾向が見られると報告している。

高有眞・成玟珂(2018b)では、「そうですか」と「그래요」の発話と知覚について、日本語人と韓国人を対象に調査し、感嘆、失望、無関心、疑い、中立の5つの感情を認識するのに、韓国語では句頭と句末の強さと持続時間が、日本語では高さで持続時間が深く関わっていると報告している。また、「そうですか」については母語話者と韓国人学習者を対象として調査し、学習者は句頭を強く高く発話する傾向が

あり、また「関心」や「感嘆」では、母語話者では上昇が見られなかったが、学習者では上昇が見られたと報告している。

2.4 その他

これ以外では、李琬兒(2017)が、韓国人学習者の発音に関するビリーフの変化を分析し、教師と学習者間でのビリーフのずれが生じないようにするためには、より学習者のビリーフやニーズを分析し、工夫をすることが求められるとしている。

また、千仙永(2017)は、音声教育を行った教師実習生間の意見交換を目的とするメーリングリストの内容を分析し、文字言語化を通じた音声の省察が行われ、「音声教育の計画、実践、振り返り、再構築というサイクル」が形成されたとして、インターネットを利用した教師間の協働によって、音声教育の質が高められる可能性を示唆している。

趙大夏(2018)は、2001年から2018年までに出题された大学修学能力試験の「文字と発音」の問題を分析し、発音に関しては「拍」「清濁音」「長短音」の問題のみで、その数も少なかったとし、コミュニケーションにおける運用能力や戦略的能力と密接な関係があるアクセント、イントネーション、プロミネンスなどの能力を評価するためにリスニング評価を導入する必要性を提起している。

3. 日本語音声

3.1 分節音

分節音では、孫範基(2017, 2018a, 2018b, 2018c)の4本の論考があった。孫範基(2017c)は、二字漢語に見られる促音化を制約理論である調和的直列派生モデルの枠組みから漢語語根の入力形として/CVC/・/CVCV/と設定しそれぞれの促音化の過程を詳細に説明している。

孫範基(2018a, 2018b)は、共に若者言葉と言われる名詞に「ル」をつけて動詞として用いる「ル言葉」についての論考である。ル言葉は五段活用するのが一般的とされているが、その中で一段活用をする動詞の多くが「エ段+ル」で、「イ段+ル」は少ない。この非対称性を説明したのが孫範基(2018a)で、動詞の抽出を国立国語研究所が構築した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を検索するために、国語研とLago言語研究所が共同開発したオンライン検索システムを用いている。また、「ル言葉」の語基は2モーラが一般的だが、2モーラ以外の「ル言葉」が生じる要因を明らかにするために、孫範基(2018b)では、意味的な要因3つと音韻・形態的制約による2つの5つの類型に分類している。

さらに孫範基(2018c)では「わたり音」について見直している。多くの研究による「日本語は頭子音の一つしか許さない」という言語類型の観点から「子音+わたり音」の連鎖を二次的口蓋音が付加された一つの子音と捉えられているが、「バビ語」「ラップでの韻踏み」という言語運用の面から「わたり音」を見直した結果、「わたり音」が頭子音群の一部であると見なされると主張している。

3.2 韻律

韻律に関する論考は3本あった。全美炷(2017a)は日本語母語話者5名を対象にフォーカス、アクセント型の組み合わせ、修飾関係がdephrasingの生起に与える影響を検討している。その結果、フォーカスが

存在する発話) フォーカスが存在しない発話、アクセント型の組み合わせにおいてはUU) AU) UA) AA(A=有核,U=無核)、修飾関係においては「形容詞+名詞」と「動詞+名詞」)「名詞の+名詞」より dephrasing率が有意に高かったと報告している。著者の日本語アクセント句のdephrasing現象に関する研究をまとめた全美炷(2017b)が日本で出版されている。

孫範基(2017a)は、Kubozono, Haruo(1994, 2006)が提起した「固有語・漢語といった日本語語彙層の中核の持つ韻律的特徴の一つとして『重音節のアクセントの牽引性』という制約が働く」という説を一般化するために、外来語アクセントの量的検証を行い、生産性の高い制約であるということを明らかにしている。

NHK放送文化研究所編『日本語発音アクセント辞典』が2016年5月に18年ぶりに5回目の改訂がなされた。李香蘭(2018)は、これまでの5回の改訂を通じた外来語アクセントの変化について調べている。李によると、アクセントの変化は平板化が最も多く、143例も見られたとし、変化の要因は、最初は外来語の原則に当てはまる-3型が多かったが、時代と共に外国語の意識が薄れ、平板化になったものと分析している。

3.3 方言音声

方言音声に関する論考は3本で、いずれも制約理論に基づいて論じている。孫範基(2017b)は、鹿児島方言における高母音削除によって生じた末尾子音の同化と弱化について、制約理論である調和的直列派生モデルの枠組みから統合的に説明している。

孫範基(2018d)は、岡山方言に現れる母音融合とその融合母音の前に現れる口蓋音の特徴を最適性理論(OT)の枠組みから分析し、服部(1951, 1960, 1979)の破擦音素/c/の設定が不要であることを指摘している。

南東北方言では無声閉鎖音が母音の間で有声化する。しかし、同じ環境で無声摩擦音は有声化しない。また、二つの無声子音の間に挟まれた高母音は後続音節の母音が非高母音であるとき、無声化する。しかし、後続音節の母音が高母音であるときは無声化しない。その代わりに、このような環境では母音間の無声閉鎖音が有声化する。李炳勲(2017)は、このような南東北方言の有声化と無声化に関する統一的な説明を最適性理論の枠組みで提示している。

4. 対照研究

対照研究の論考は非常に少なく、2本であった。全美炷(2018b)は、韓国語の閉音節の母音持続時間について、日本語の閉音節に関する先行研究との比較から明らかにしている。その結果、韓国語の閉音節は音節末子音が鼻音[m, n, ŋ]の条件では母音持続時間が短縮したが、鼻音でない条件では被験者によって個人差が見られるとしている。

孫在賢(2017a)は、n+1の対立をもつ韓国語大邱方言と日本語東京方言を対象に、漢字接尾辞「的・性」のアクセントを取り上げ、比較している。その結果、東京方言では、先行要素のアクセントを消去し、全体のアクセントを無核化(平板化)するのに対して、韓国語大邱方言では、「的」は無核0型の一音節語、「性」は1型の一音節語と同じ振る舞いをするのがわかったと報告している。また、著者の韓国語諸方言アクセント体系の分布についてまとめた孫在賢(2017b)は、2017年の第45回金田一京介博士記念賞を受賞している。

5. その他

上記の項目に入らなかった論考は2本で、オノマトペに関する論考と日本語のハングル表記に関する論考だった。金榮蘭(2018)は、清濁の対立がある2モーラの繰り返しになっているオノマトペに対する韓国人学習者の語感を分析し、清音と濁音の対立では語感の対立は見られなかったとしているほか、半濁音については、「強い」「華やか」「うるさい」のようなイメージを持っていたと報告している。

山川仁子・天野成昭(2018)は、日本語母語話者33名を対象とした聴取実験を行い、「ツ」, 「チュ」, 「ス」, 「シュ」のハングル表記について探っている。その結果、「シュ」を表すハングル表記として「ㄱ」が、「ス」を表すハングル表記として「ㅅ」が、「チュ」は「ㅈ」あるいは「ㅊ」が、日本語母語話者に正しく認識されることがわかったが、「ツ」では、「ㅊ」, 「ㅅ」, 「ㅈ」が最も同定率が高かったが、これらは「チュ」としても知覚される可能性が高いため、「ツ」を表す適切なハングル表記を見いだすことはできなかったとしている。

6. 分析

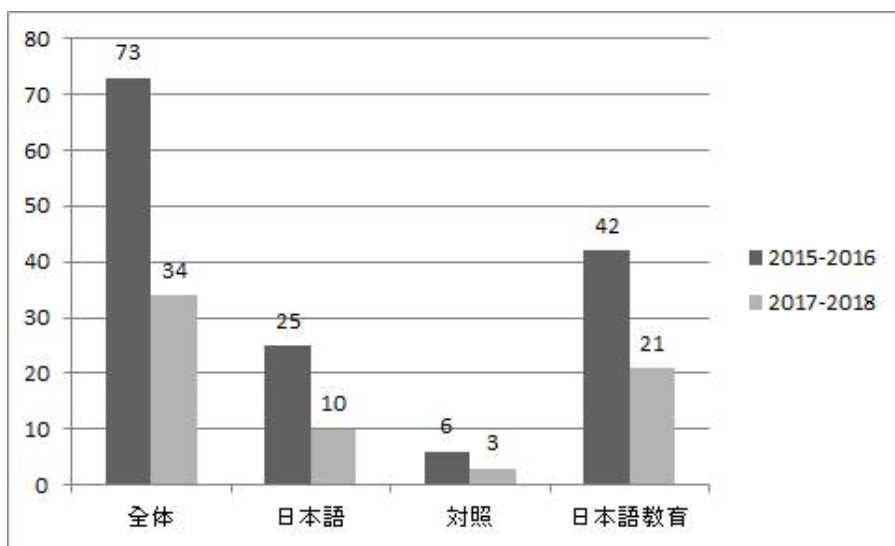
今期の特徴として、1) 研究の著しい減少 2) 音声教育研究の比重増加傾向の維持 3) 新たな視点による研究の拡がりの3点をあげた。以下ではそれぞれについて分析してみたい。

6.1 研究の激減

今期の特徴としてあげた研究の激減について考察する。今期の論文は34本で前期の論文73本の半分以下となっている。その内訳を比較すると次頁の<図1>のようになる。

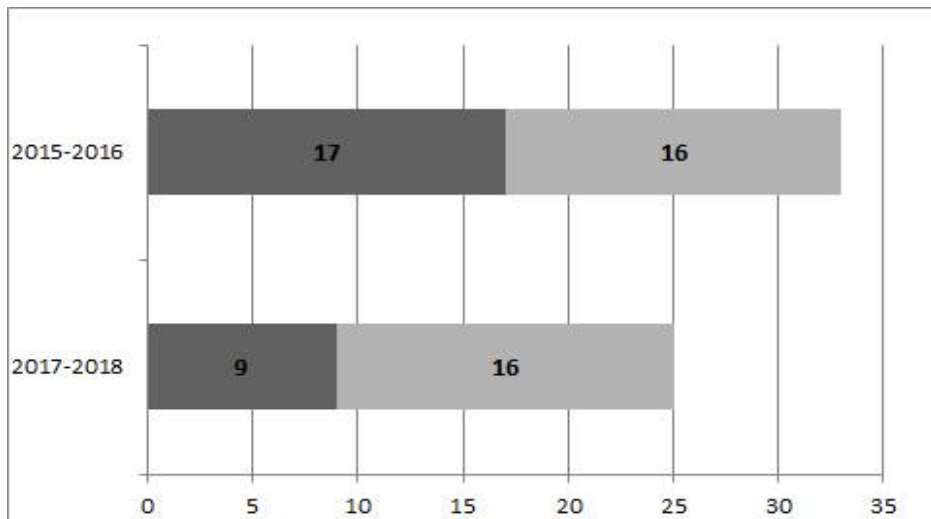
<図1>を見てもわかるように、日本語と韓国語との対照研究、日本語教育に関する論考の数は、それぞれ半分となっており、日本語音声に関する研究は、前期の25本から今期は10本に減少している。

執筆者の数について見てみると、前期は33名、今期は25名であった。つまり、前期は一人の研究者が複数の論文を書いている場合が、今期よりも多かったと言えよう。研究者の母語別の内訳を見ると、前期では韓国人研究者が26名で日本人研究者が7名であったが、今期は韓国人研究者が19名で日本人研究者が6名であった。

〈図1〉 前期と今期の論文数の比較²⁾

音声・音韻分野の研究者数を把握するために、前期でのみ論文を執筆していた研究者と今期でのみ論文を執筆していた研究者、前期と今期の両方で論文を執筆していた研究者に分けて調べてみた。

これを図にすると次の〈図2〉のようになる。

〈図2〉 研究者数³⁾

前期の73本の論文は、33名の研究者によって執筆されており、今期の34本の論文は25名の研究者に

2) 全体は論文の総数を日本語は日本語音声を取り上げた論文数を、対照は対照研究の論文数を表す。今期のその他の論文2本は便宜上、日本語教育と対照研究にそれぞれ加えた。日本語数字の単位は本。

3) 数字の単位は名。

よって執筆されていたことはすでに述べた。このうち、前期と今期の両方で論文を執筆していた研究者は16名であった。また前期でのみ論文を執筆していた研究者は17名、今期でのみ論文を執筆していた研究者は9名であった。したがって、2015年から2018年までに論文を執筆した研究者は合わせて42名ということになる。この研究者の数は決して多いとは言えない。

次に、韓国における日本関連の研究の動向について調べてみた。研究の動向は学会の基調講演を見るとよくわかる。今期の基調講演を知り得る限りで調べてみると、次の〈表2〉のようになる。

〈表2〉 2017-2018における学会の基調講演

	日本語学	日本文学	日本語教育	日本・日本文化
講演数	5(文法)	2	8	17

日本文学・日本文化関連が17で圧倒的に多く、日本語教育が8、日本語学は文法のみで5、文学は2であった。今期、音声・音韻に関するテーマが取り上げられたことはなく、筆者が知る限り、2016年の日語日文学会春季国際学術大会で「日本語音声・音韻研究の現状と課題」というテーマで基調講演が行われたのが最後である。このことからわかるように、韓国の日本関連の研究の中心が、日本語学から日本・日本文化と日本語教育に移っていることは紛れもない事実である。

6.2 音声教育の比重増加傾向の維持

音声教育の比重が高まったのは、今期だけの特徴とは言えない。前期も全体の57%を占めており、今期の59%とほぼ変わらないからである。李康民(2012)によると、2007年から日本語教育関連の論文が増加の傾向を見せ始めたが、このことも音声教育研究の増加に影響を及ぼしているだろう。

音声研究がそれまでの調音音声学中心から音響音声学中心へと移行したのは、PCの普及とデジタル音声処理技術の発達に因るところが大きい。先にも述べたが、現在ではpraatやwavesurferといったフリーウェアをダウンロードすれば、音声分析ができるようになった。教育の現場で日々学習者の音声教育に努力を傾けている研究者が学習者の音声を研究対象とするのは当然のことかもしれない。今期の研究でも学習者の音声を研究対象としている論考が13本、聞き取りテストによって習得度をはかった論考が3本、学習者や教師のビリーフや意識を調査した論考が4本あった。研究の目的はそれぞれ異なるが、いずれも学習者の発音や聞き取り能力をいかに向上させるかを最終目標としているものと思われる。

6.3 研究の拡がり

今期の論考を見ると、これまでも取り上げられて来た問題点に対して、新たな視点からアプローチしている論考が目立った。

例えば、語頭の破裂音ではこれまで、韓国人学習者の発音の特徴として、語頭の有声音の無声化と語中の無声音の有声化についてよく取り上げられて来た。今期の陣宗福・関光準(2018)では、語頭の破裂音のVOTに注目し、すでに破裂音の発音を習得した学習者を対象として、語頭の破裂音のVOTを測定している。日本語の語頭有声音の+VOT化が若い世代で進んでいるということは既に指摘されている(高田、2004)が、この傾向が韓国人学習者にも見られるということを検証したのである。これによって、著者も提起していることだが、これまで語頭の有声破裂音の発音指導は、前に「ん」または「母音」また

は「ロ、日、ㄷ」の終声を付けて-VOTとして発音するという方法が一般的であったが、今後は音声教材や教室での発音指導の方法を全面的に改めなくてはならないことになる。

有声摩擦音/z/は韓国人学習者にとって、発音が非常に難しいため、これまでも多くの研究でその難易度や習得について論じられて来た。また有声破擦音/tʃ/が語中では有声摩擦音/z/として発音されることもよく知られている。しかし崔鉉弼(2017)では、語中有声摩擦音/z/が聴覚では有声音として知覚されても、実際には有声性を表すボイスパーの見られない無声化現象が起こっており、母語話者・学習者ともに、それぞれ43.7%、52.6%というかなり高い比率で起こっていると報告している。

モーラ音である長母音と短母音の発音も韓国人学習者にとって難易度が高く、これまでもしばしば研究対象となって来た。全美炷(2018)では、その誤用調査ではなく、短母音と長母音の知覚判断の際の反応時間に注目している。

韓国人学習者の母音のF1F2値から母音四角形を描くと、どのようになるかという報告はこれまでもあった。高慧禎(2017)では母音のF1F2の分布に着目し、分布の幅を問題としている。

また、韓国人学習者の日本語単音の聞き取りに関する習得の難易度に関する調査も行われて来た。李敬淑(2017)では正答率だけでなく、有標性理論に基づいて、それぞれの単音を有標音と無標音に分け、難易度が高い音が無標音であれば言語個別的な特徴、有標音であれば言語普遍的な特徴としている。李敬淑(2018)もスマートフォンのアプリを利用した音声教育を実践し、その結果を報告したものであり、新しい時代の日本語教育を考える契機となる研究だと言える。

音声研究で対象となる音声はほとんどが読み上げ(朗読)音声であった。これに対して、これまでも問題が提起されて来た(関、2017・前川、2009)が、陣宗福・関光準(2018)、酒井真弓(2018a,b)では自発音声を対象としている。

全美炷(2017a)はアクセント句のdephrasing現象の生起環境を確率論的な観点から述べている。また、生起要因の相互作用について定量分析を行っている。全美炷(2017a)は読み上げ音声を対象としているが、全美炷(2017b)には自発音声コーパスを対象とした研究も含まれており、読み上げ音声と自発音声の両面からdephrasing現象の生起について考察している。

今期の論考の中には、日本語研究の成果を韓国語に応用した研究もあった。全美炷(2017a)は韓国語の閉音節の母音持続時間について、日本語の閉音節に関する先行研究との比較から明らかにしている。また、日本語と同じアクセント体系を持つ大邱方言を対照した孫在賢(2017)もその一つと言える。また高有眞・成玟珂(2018b)では、学習者の音声と母語話者の比較とは別に、日本語と韓国語の特徴も比較しており、日本語のパラ言語情報の研究を韓国語にも応用したものとなっている。

大量データを用いて検証した論考も見られた。これまで限られた根拠によって提起された音韻現象や制約を、孫範基(2017a、2018a、2018b)では量的検証によって一般化している。

7. 今後の展望と課題

今期の特徴としてあげた研究の激減は、韓国における研究者層の絶対的薄さに起因している。今後、この分野における研究者の育成が急を要する課題であることを痛感する。その意味で、国語国立研究所が次代の研究者育成を支援するために行っているNINJALチュートリアルが、2018年に韓国で日本語学会と韓国日語教育学会との共催で、「日本語の音声と文法」というテーマの講習会を行ったことは、研究

者育成に大きく貢献するものと期待される。また、趙大夏(2018)が指摘しているように、大学修学能力試験に音声の問題がもっと出題されれば、学習者と教育者の双方が音声または音声教育により関心を持つようになるだろう。加えて日本語学研究者一人一人が研究者の育成に努力しなければならないと思う。

音声・音韻研究に音声教育が占める比重が非常に高いが、この傾向は今後も続くだろう。ただし、研究の成果を反映した音声教育シラバスが構築されなければ、実際の教育現場で生かすことができない。今後は、音声教育のシラバスや音声教材に関する研究も活発に行われるなければならないと思う。

多数の被験者の自発音声を研究の対象とすることが望まれるが、それは決して容易なことではない。今後、韓国人学習者のさまざまな日本語音声を収録した大規模なデータベースが作成されることを期待したい。

日本の音声学会では、22巻2号(2017)で「現代朝鮮語 / 韓国語における音声的・音韻的な変異と変化」を特集するなど、韓国語研究が活発に行われている。今期の論考の中にも、日本語研究の成果を韓国語に応用した研究が見られたが、このような研究または、日本語と韓国語とを対照した研究は、日本語および韓国語の音声の特徴を明らかにするためにも、また韓国人学習者に対する音声教育の土台ともなることから、非常に重要であると思われる。さらに、韓国人研究者として、または韓国で日本語教育に携わっている教育者として、対照研究に最も近く、研究のための環境にあることを考えると、今後、このような研究が増えて行ってほしいと強く思う。

インターネットでさまざまな情報に容易にアクセスできるようになり、コーパスやその検索ツールが無料で公開されていることで、今後、大量データを利用して量的検証を行う研究も増えて行くだろう。

また、発音の自学自習を可能にする音声認識技術を利用したコンピューターソフトやスマートフォンのアプリが次々に開発されている。さらに、アクセント・イントネーションが即座にわかり、発音してくれるオンライン日本語アクセント辞書もある。このようなコンピューター支援教育教材を利用した音声教育の実践報告は今後増えるものと思われる。

8. おわりに

2017年から2018年にかけて、韓国で発行された18の学術誌に掲載された音声・音韻関係の論文について概観し、今期の特徴および展望と課題を述べた。特に展望と課題は独断と偏見で書いてしまった感があり、異論も多かろうと思う。また、筆者の力不足から抜けや内容把握に誤りがある可能性があること、また筆者の浅学と紙幅の都合により、音韻の史的研究には触れることができなかったことをご容赦いただきたい。

【参考文献】

- 高有眞(2017a)「일본어 사과표현 『すみません』의 발화와 지각」『日本語文学』78 日本語文学会 pp.1-24
 _____(2018b)「일본어 감정 표현의 발화와 지각에 관여하는 음성자질」『日本語文学』82 日本語文学会 pp.1-26
 高有眞・成琬珂(2018)「韓国人日本語学習者のパラ言語情報－韓国語と日本語の句頭・句末にみられる音声的特徴の比較－」『日本言語文化』44 韓国日本言語文化学会 pp.109-135

- 高慧禎(2017)「現代日本語の母音に関する音響分析—日本語学習者による発音の実体を探る—」『比較日本学』40 漢陽大学校 日本学国際比較研究所 pp.185-198
- _____(2018)「韓国人日本語学習者のザ行音とジャ行音に関する音響音声学的考察」『日本語教育』86 韓国日本語教育学会 pp.31-42
- 金榮蘭(2018)「韓国人日本語学習者の語感分析を通じた日本語オノマトペの特徴-形態的音韻的特徴と意味との関係-」『日本文化研究』67 東アジア日本学会 pp.183-198
- 金漢植(2018)「シャドウイングにおけるアクセントの正確度研究-通訳教育の観点から、上級学習者を中心に-」『日本言語文化』第45輯 韓国日本言語文化学会 pp.137-153
- 閔光準(2017a)「일본어 음성 연구의 현황과 과제-연구와 교육의 상호 연계 및 연구 성과의 공유를 위하여-」『日語日文学研究』98 韓国日語日文学会 pp.19-39
- _____(2017b)「音声・音韻研究の現状と展望」『日本語学研究』51 韓国日本語学会 pp.9-19
- 孫範基(2017a)「日本語の外来語に現れる音韻的特性—音節量とアクセントについて—」『日本研究』71 韓国外語大学校 日本研究所 pp.153-172
- _____(2017b)「鹿児島方言における同化と弱化—高母音削除によって生じた末尾子音の制約—」『日本研究』44 中央大学校 日本研究所 pp.105-126
- _____(2017c)「現代日本語の二字漢語に見られる促音化の諸相—調和的直列派生モデルに基づく漸進的同化過程—」『日本学研究』51 壇国大学校 日本研究所 pp.378-404
- _____(2018a)「現代日本語における新動詞の形態的変異 —五段動詞の一段活用形について—」『日本学研究』54 pp.437-460
- _____(2018b)「日本語のル言葉に現れる語基の長さについて」『日語日文学研究』106 韓国日語日文学会 pp.125-143
- _____(2018c)「日本語の音節構造—わたり音の位置づけについて—」『日本語教育研究』45 日語教育学会 pp.59-76
- _____(2018d)「現代日本語の母音融合に現れる口蓋化について—岡山方言の例から—」日本語學研究 56 韓国日本語学会 pp.37-54)
- 孫在賢(2017a)「韓国語大邱方言と日本語東京方言の漢字接尾辞『的・性』のアクセント」『比較日本学』41 卷漢陽大学校 日本学国際比較研究所 pp.281-290
- _____(2017b)『韓国語諸方言のアクセント体系と分布』책사당
- 安鍾順·崔英淑(2017)「일본어 모음의 음향음성학적 분석」『比較日本学』41卷 漢陽大学校 日本学国際比較研究所 pp.385-405
- 李康民(2012)「한국에서의 일본어학 연구-현황과 과제-」『日本学報』第91輯 韓国日本学会 pp.1-8
- 李敬淑(2017)「한국인 학습자의 일본어 음운 습득에 있어서 언어개별성과 보편성에 관한 연구」『日本語教育研究』41 日語教育学会 pp.119-132
- _____(2018)「음성인식 어플리케이션을 활용한 일본어 음성교육 방안 연구」『日本語教育』85 韓国日本語教育学会 pp.29-42
- 李炳勲(2017)「最適性理論による南東北方言の有声化と無声化の分析」『日本文化研究』63 東アジア日本語学会 pp.287-307
- 李玢兒(2017)「発音に関するピリーフの変化—一人の韓国人日本語学習者の事例を通して—」『日語日文学』76 大韓日語日文学会 pp.145-159
- 李香蘭(2018)「日本語教育のための外来語アクセントの65年間の変化のパターン調査」『日本文化学報』76 韓国日本文化学会 pp.343-362

- 全美柱(2017a) 「동경어의 악센트구 해지에 관한 실험연구—포커스, 악센트형, 수식관계의 영향을 중심으로—」 『日本語學研究』 52 韓国日本語学会 pp.65-84
- _____ (2017b) 『東京語におけるアクセント句の形成 —実験及びコーパスによるdephrasingの分析』 くろしお出版
- _____ (2018a) 「日本語の短母音と長母音に対する韓国語話者の反応時間分析-日本語話者との比較から-」 『日語日文学研究』 第105輯 韓国日語日文学会 pp.3-21
- (2018b) 「한국어 폐음절의 모음 지속시간-일본어 폐음절에 대한 선행연구와의 비교-」 『日本語學研究』 57 韓国日本語学会 pp.139-153
- 趙大夏(2018) 「대학수학능력시험 일본어 의 문자와 발음 문항 분석」 『日本語文學』 80 日本語文学会 pp.203-222
- 陣宗福・関光準(2018) 「한국인 학습자의 일본어 어두 유성파열음의 발음 습득 실태-자발(회화) 음성의 VOT를 중심으로-」 『日本語學研究』 57 韓国日本語学会 pp.155-170
- 千仙永(2017) 「音声教育実践における実習生間の意見交換—メーリングリストの内容分析から—」 『日本語學研究』 52 韓国日本語学会 pp.101-120
- 崔鉉弼(2017) 「日本語の語中有声摩擦音の無声化現象—日本語母語話者と韓国語母語話者を比較して—」 『日語日文学研究』 101 韓国日語日文学会 pp.192-211
- 有元光彦(2018) 「音韻(理論・現代)」 『日本語の研究』 14(3) pp.49-56
- 寛山明代(2017) 「日本語単語アクセントの傾向分析—日本語能力試験N5レベルを中心に—」 『日語日文学』 73 大韓日語日文学会 pp.81-104
- 北野孝志(2017) 「語尾上げ現象と助詞との共起に関する考察—日本語母語話者との対照を中心に—」 『日語日文学研究』 100 韓国日語日文学会 pp.29-47
- 高田三枝子(2004) 「日本語の語頭有声歯茎破裂音/d/における+VOT化と世代差」 『音声研究』 8(3) 日本音声学会 pp.57-66
- 酒井真弓(2018a) 「韓国人日本語学習者の自然発話における平叙文のイントネーション」 『日本学報』 114 韓国日本学会 pp.19-34
- _____ (2018b) 「韓国人学習者の日本語自然音声に現れたピッチパターンの傾向」 『日本語教育研究』 43 韓国日語教育学会 pp.113-135
- 藤田蘭子(2018) 「韓国人日本語学習者における日本語のザ行音とジャ行音の習得について—聞き取り調査を通して—」 『日本文化学報』 79 韓国日本文化学会 pp.433-452
- 前川喜久雄(2009) 「イントネーション研究の現状と課題」 『日本語学』 33(7) 明治書院 pp.4-14
- 山川仁子・天野成昭(2018) 「日本語の無声摩擦音・摩擦音を表すハングル表記の知覚的妥当性の検討」 『日本語學研究』 55 韓国日本語学会 pp.127-139
- Kubozono, Haruo(1996) Syllable and accent in Japanese: Evidence from loanword accentuation, *The bulletin of Phonetic Society of Japan* 211, pp.71-82
- _____ (2006) Where does loanword prosody come from?: A case study of Japanese loanword accent, *Lingua* 116, pp.1140-1170

< 學術誌 >

- 『比較日本学』第39-44輯（漢陽大学校 日本学国際比較研究所）
『日本近代学研究』第55-62輯（韓国日本近代学学会）
『日本文化学報』第72-79輯（韓国日本文化学会）
『日本文化研究』第61-69輯（東アジア日本学会）
『日本研究』第71-78号（韓外国語大学）
『日本研究』第27-30輯（高麗大学）
『日本研究』第44-49輯（中央大学）
『日本語教育』第79-86輯（韓国日本語教育学会）
『日本語教育研究』第38-45輯（韓国日語教育学会）
『日本言語文化』第38-45輯（韓国日本言語文化学会）
『日本語文学』第76-83輯（日本語文学会）、
『日本語文学』第72-79輯（韓国日本語文学会）
『日本語学研究』第51-58輯（韓国日本語学会）
『日本学報』第110-117輯（韓国日本学会）
『日本学研究』第50-56輯（壇国大学校 日本研究所）
『日語日文学』第73-80輯（大韓日語日文学会）
『日語日文学研究』第100-107輯（韓国日語日文学会）
『翰林日本学』第30-33輯（翰林大学校 日本学研究所）

— 〈 요 지 〉 —

음성·음운 연구의 현황과 전망

본고는 2017년부터 2018년에 걸쳐 한국에서 발행된 18권의 학술지에 게재된 음성·음운관계 논문에 대하여 개괄하고, 그 특징 및 전망과 과제를 논한 것이다. 이번 시기의 음성·음운연구에 관한 논문은 34편이며, 2015년부터 2016년의 73편에 비하면 반수 이하로 크게 감소하였다. 이 중 음성교육에 관한 논고가 20편으로 전체의 반 이상을 차지하며 음성교육 비중의 증가를 보였다. 새로운 시점의 연구 확장 또한 나타났는데, 앞으로도 이러한 동향은 계속될 전망이다.

더불어 연구자의 육성과 대규모 한국인 학습자의 음성 DB 작성, 연구 성과를 음성교육에 활용하기 위한 음성교육의 새로운 교수요목 구축을 이후의 과제로 한다.

논문분야 : 음성학, 음운론

키워드 : 음성교육, 분절음, 운율, 대조연구, 방언음성

■ 사카이마유미(酒井真弓)

덕성여자대학교 교수

smysakai@naver.com

■ 投稿日 :	2018년	12월	30일
■ 審査開始 :	2019년	1월	14일
■ 審査完了 :	2019년	2월	7일
■ 掲載確定 :	2019년	2월	11일